## 模試と同傾向の出題 ~ベネッセ・駿台模試より~

## 国語 センタ・ -試験・第2問 問6 第1回ベネッセ・駿台マーク模試・第2問 問6 問 6 解答番号は 3 ① (5) 4 2 この文章の表現に関する説明として適当なものを、 6 6 4 3 0 0 この文章の表現に関する説明として適当なものを、 年を重ねながらもまだ若々しさを保ちつづけている主人公を暗示するとともに、りんごの隠された美しさを示唆するも 写によって主人公の感じた弟菊男のあり方を象徴させるとともに、 類の異なったりんごが登場するが、それらはいずれも主人公の時子にささやかながらも幸福感をもたらしてくれたもの いくなかで身についた年相応の皮肉な見方や自嘲を感じさせるものとなっており、主人公の性格を浮き彫りにすること 公の心に余裕があったことを示すものとなっており、 かび上がらせようとする手法が取られている。 なっているが、ところどころにデパートの女店員や弟菊男の視点からの描写も交え、主人公時子の人物像を立体的に浮 に役立っている。 もたせようとする工夫がなされている として共通している。 いていると」など、 〇君と一緒に是政に行く旅が、「私」にとって印象深い記憶であったことを強調している。 解答番号は 除立たせる効果を発揮している 6・7行目の「時子はゆっくりと時を稼ぎながら」、17行目の「時を稼げるのが有難かった」といった表現は、 に「ぷんとかぐわしい香りがした」という嗅覚体験を際立たせる表現となっている。 喩を用いることによって、「私」の心理を間接的に表現している 菜園を始める際の会話部分をテンポよく描き、妹の快活な性格を表現している。 16行目「おかしな葱坊主」、25行目「黒い蕪のような格好」、27行目 125行目「垂れ下ったりんごの皮は、おもてが赤く、裏は青く白い。ふちにうす赤い紅が滲んでいる。」という描写は 66行目「ポマードとたばこの」で始まる段落や99行目「公団住宅の階段を上り」で始まる段落では、匂いに関わる描 本文には、果物屋の店先のりんご、留守番をしたときに男たちがくれたりんご、時子のアパートでのりんごと、 「私」の状況が次第に悪化していく過程を強調する表現になっている 本文の表現は、時子という三人称の客観的な人物を設定しつつその内面に入り込んだような視点からの描写が中心と 2行目「空地利用しようか!」では「!」を使用し、また4行目「茄子やトマトなんかを。」では述語を省略することで、 75行目「疲れていた。寒かった。おなかが空いていた。」という部分は、 25行目「それは、 35行目「サアサアと音を立てながら」、83行目「ポツリ、ポツリと、部屋々々に灯がつきはじめ」、 82行目「建物は、窩をもった骸骨のように見え」、95行目「私を迎えるように頭を並べて咲き揃っている」のように、 44・45行目や、 19 19 • 20 60行目における月見草の匂いの有無に関する叙述は、10行目の、 カタカナ表記の擬音語・擬態語を使うことで、それぞれの場面の緊迫感を高めている。 六月の中旬。」、37行目「多磨墓地前で停車。」、「次が北多磨。」などの体言止めの繰り返しによって、 次の 次の 本文後半に向かって精神的に追い詰められていく場面を対照的に 1 1 ⑥ のうちから二つ選べ。 6のうちから二つ選べ。 主人公の感覚を読者にも共有させて場面に臨場感を 「頭のお面のようで」などの比喩表現は、 短い文を畳みかけるように繰り返すことで、 「私」が網棚から月見草を下ろすとき 解答の順序は問わない 解答の順序は問わな 93行目「ポクポク歩

今回のセンター試験の第2問小説・問6では、表現に関する6肢2択の設問が出題された。具体的な行数を指定し、それぞれの場面における表現について問うている。

第1回ベネッセ・駿台マーク模試の第2問小説・問6でも、表現に関する設問を出題している。 どちらも、問題文と選択肢とを対照させて吟味すれば正解にたどり着ける設問だが、限られた時間の中で細部まで丁寧に読み取り、適否を判断する必要があった。

どちらも状況・心情の展開を意識しながら問題文を読み進め、それぞれの表現がもつ効果や特徴を的確に読み取り、処理する力が求められる出題であった。